農村集落の共同性を反映する空間形成手法

——防風雪柵カッチョのある青森県津軽地方の農村集落の考察——

A STUDY ON THE TRADITIONAL FORMATION OF DWELLING SPACE
REFLECTED ON THE CONCERN FOR RURAL COMMUNITY——Study of the Rural Settlement which have the fence for blizzard
“KATCHO” at Aomori pre. Tsugaru district——伊藤 庸一*
Yoichi ITO

This paper's aim explains the Traditional Formation of Dwelling Space which is reflected on the Concern for Rural Community.

Therefore, it was investigated on the traditional event “MUSHIOKURI”, the recognition of dwelling space, the organization of residences and the fence for blizzard “KATCHO” at Aomori prefecture Tsugaru district “KAMITOYOOKA & SHIMOTOYOOKA”.

The results are as follows :

1. the rural community hold “MUSHIOKURI” in common
2. the rural community hold same recognition of dwelling space in common
3. organization of residential space is standard of the road & the river
4. the west “KATCHO” include all residential space

Keywords : KATCH, MUSHIOKURI, Organization of residential space, Concern for rural community

1. 目的・方法

伝統的な農村集落では、屋敷地・住居は個人の私有財産でありその構え方・作り方は個々の持ち主の判断によっているにもかかわらず、総体としての集落空間には、それぞれの地域に固有の調和の取れた景観を見ることができる。

これは、例えば「集落空間の計画学—農村集落のかたち」¹⁾や「農村集落の地形的立地条件と空間構成に関する研究」²⁾で論述されるように、1つは立地する地勢的条件を読み取り、それと調和するように住居を構え、作ろうとする結果、地域に固有の景観が現出したのである。背景となる地勢的条件を読み取り最も快適な住空間を形成しようとするゆえに、それは地域的であり、地勢的条件との調和に富む。

ほかの1つとして、既報「農村集落における社会集団の重層的結合」³⁾によって明らかとした集落成員の緊密なまとまりから示唆される、長い歴史の中で培われてきた共同体的社会への関心⁴⁾の反映があげられる。

すなわち、私有の屋敷地・住居であるが、個々の空間

の作り方に共同体的社会への関心が反映され、作り方が集積された結果、集落景観に調和の取れた地域らしさが現象すると考える。例えば、再三紹介される岐阜県白川郷の合掌造り民家群の調和の取れた集落景観は、茅と労力を互助・協同する慣行に基づいた共同体的社会への関心の典型的な反映である⁵⁾。

近年、集落環境整備において自然環境の保全・整備とともに地域住民の主体的関与が現代的関心事となっており⁶⁾、住民の空間形成における共同体的社会への関心の反映を解明することは有意である。

以上の観点に立ち、本研究では伝統的農村集落の空間形成における共同体的社会への関心の反映を、次の手順によって明らかにする。まず1) 集落成員総出の伝統的行事（本稿では虫送りを取り上げる）、ならびに成員の集落空間認識により社会集団としてのまとまりを説明する、次いで2) 成員に共有の空間の構え方（本稿では構え方の空間軸として道を仮定する）を明らかにする、続いて3) 屋敷囲いの作り方における共同体的社会への関心（本稿では地吹雪を防ぐ防風雪柵を考察する）をとら

本論文の内容の一部は、昭和62年度日本建築学会大会学術講演会、ならびに同東北支部研究発表会にての報告をとりまとめ、論考を加えたものである。

* 日本工業大学 助教授

Assoc. Prof. of Nippon Institute of Technology

図一 調査対象集落位置

表一 調査内容

調査内容	上豊岡	下豊岡	計	調査概要
アンケート調査	対象59 回収40	対象90 回収58	149戸 98戸	社会的活動・伝統的行事・居住環境・住み方・空間認識に関する調査、全戸対象
ヒヤリング調査	7	5	12戸	社会集団の組織活動・伝統的行事の運営・雪対策・生活環境評価に関する調査
間取り採図	6	4	10戸	伝統的住居の間取り採図・部屋呼称・各部屋の使い方・増改築要求に関する調査
屋敷構え採図	63	95	158戸	主屋・附属屋の採図・屋敷の囲み実測・各建物・敷地の使い方に関する調査

表二 中里町気象データ (1984 1月)・豊岡農業概要 (1980年農業センサス)

1月最高気温	1月最低気温	平均日照時間	最大瞬間風速	平均積雪量
+2.7°	-19.5°	3.9時間/日	13m/s・WNW	1.4m

総世帯数	総農家数	農家率	専業/兼業数	水田率
167戸	138戸	82.6%	8/130戸	98.7%

える。以上を実証的に明らかにするため、1) 伝統的行事である虫送り、2) 道を軸とする住居の景観構成、3) 防風雪柵カッチョが特徴的に見られる青森県上豊岡・下豊岡集落を調査対象とした (図一1、表一・2参照)。

対象地中里町豊岡の位置する津軽平野は、かつての北前船の寄港地である十三湊の後背地として多くの集落が栄えたが、鉄道の発達とともにさびれ始めた歴史をもつ。

伝統行事の虫送りは、かつてはいずれの集落でも見られたと言われるが、集落の歴史を反映して簡略化された集落も少なくない。またカッチョ (地域によって呼称は異なる) は、津軽平野各地で見られる防風雪柵であるが屋敷単位を囲む作り方やカッチョをもたない作り方も多い。豊岡は虫送り行事がよく継承され、住居の連続的な構成に応じてカッチョが連続する景観を特徴的に見せる集落である。

2. 道を空間軸とする集落成員のまとまり

1) 虫送りにみる集落成員のまとまり

民俗学で報告される⁷⁾虫送りは、藁人形を中心として田の中をねり歩き最後に藁人形を村境の海や川に流す、悪病退散を祈願する行事である。しかし上豊岡・下豊岡の虫送りは、①行事に村人が総出で参加し悪病退散と五穀豊穡を祈願すること、②後述する住居の並びの空間軸となる南北方向の川に沿う道で行事

が展開されること (この道と並行する農地との境の道や東西方向の中心集落に向かう道、田の中の道は使われない)、③行事の展開された道の住居群のはずれに藁人形 (ここでは蛇) を設置することの点で特徴がある。

以下に行事の展開を説明する (図二参照)。行事の主役である蛇は、稲藁製で胴体径約50cm、長さ約2mの派手なものである。蛇の作製はそれぞれの集会所で老

人会が中心となり、子供会が手伝う形で行われる。完成された蛇は集会所に置かれ、行事当日を待つ。当日の行事運行は、青年団・婦人会が中心となる。つまり、この行事には村人が総出で参加する。集会所の蛇は当日の朝、青年団によって上豊岡・下豊岡を結ぶ川に沿う道を上豊岡のはずれにある加茂神社まで運ばれる。ここで悪病退散・五穀豊穰・村中安全を祈願した後、蛇を先頭に笛・鐘・太鼓・お囃子の行列が組まれ、上豊岡はそのまま川沿いの道を1軒ずつにぎやかに巡り歩き、おおむね下豊岡との行政上の集落界付近で折り返し川の反対側の家を巡って、最後に蛇を神社の村はずれ側の木に掛け、行事が終了である。その後、集会所に老人から子供まで集まり、宴が開かれる。

下豊岡では、神社を出発した行列は川沿いの道を静かに進み、おおむね下豊岡集落に入るあたりから上豊岡と同様に、川沿いの道をにぎやかに1軒ずつ練り歩く。すべての家を巡り終わると、神社とは反対側の下豊岡の居住域のはずれの木に蛇を掛けて、行事が終了となる。その後は、下豊岡の集会所に老人から子供の村人が集まり、宴の開始となる。

以上の、村人総出の伝統行事が、川に沿う両側の道で展開されること、悪病退散・村中安全の象徴である蛇が

この道の集落居住域のはずれに設置されることから、道が集落社会の空間軸として重要な位置を占めていることを得る。

2) ムラ領域認識

心理的な集落空間の大きさの認識をムラ領域とし、設問「自分の地域と言われた場合、どのくらいの大きさを考えますか、地図にその大きさを記して下さい⁸⁾」により空間認識をとらえる。

回答線を累積すると(図-3参照)特徴的な傾向として、①道に沿う住居の並びを囲む形の累積線、②上記に説明した虫送りの蛇を設置する集落居住域のそれぞれ端部の累積線、③両集落間の行政上の境界部分に累積線が見いだせる。①・②より、集落空間が住居の集積によってとらえられていることが導かれる。柳田国男の指摘「住居の1集団、すなわち宅地のある部分をムラと称し、田畠山林原野はムラに属する土地として認識される⁹⁾」をあわせ、居住地がムラの領域であり、農地山林の生産空間を含まない空間認識が演繹される。②より、住居の集積が終了し虫送りの蛇が設置されるなどの形態的に象徴

図-2 虫送り行事

下豊岡の虫送り

上豊岡の虫送り

設問「自分の住んでいる地域と言われた場合、どのくらいの大きさを考えますか」に対する地図記入の回答線を累積して示す

図—3 ムラ領域認識

されるところには領域認識に明快な一致が見られるが、③より、行政上の境界表示が特になく住居が景観的に連続している場合においても、ムラの領域認識は、行政上の集落境界の影響を受けるものの、虫送り行事に象徴される各集落単位の自立的な活動に基づいた領域認識が共有されることが導かれる。たとえば、分家等が行政上の境界を越えて出ている場合などは、行政上の集落境界とは異なるムラ領域が共有される、と考えられる。

言い換えれば、虫送り行事に象徴される各集落単位の自立的な活動が顕著であれば、領域認識にややズレがあるものの、景観的な連続にもかかわらずムラ領域が共有されることがうかがえる。

以上から、道に沿って並ぶ集落単位の住居群のまとまり（以下、居住域とする）をムラ領域として共通に認識

設問「自分の地域の入口（他の地域との境）と思われるところはどこですか」に対する地図記入の回答を累積、%で示す

◀ 下豊岡 ▶ 上豊岡 ◀ 50 %

図—4 ムラ境認識

していることを得る。

3) ムラ境認識

心理的な集落空間の境界の認識をムラ境とし、設問「自分の地域の入口（ほかの地域との境）と思われる所はどこですか、地図に記して下さい」により空間認識をとらえる¹⁰⁾。

回答を集積すると(図—4 参照)4カ所への集中を得る。1つは上豊岡内の神社付近に上豊岡 43 %、下豊岡 26 %である。ここは上豊岡の虫送りの設置場所とも一致する。ここへの集中は上豊岡で高いのは当然であるが、下豊岡の住民からも高い回答が見られる。これは、虫送りの行事のほかに盆踊り、注連縄奉納等の行事がこの神社で行われること、何よりも上・下豊岡の氏神であること、2集落の住居の集積がここで終わることが空間認識を明確にしたと考えられる。2つ目の集積点は下豊岡の集落端

9%である。ここは住居の集積が終わり農地になる境目である。2集落に共通の行事空間となっていないことから%は低くなっているが、上豊岡と同様に下豊岡の虫送りの設置場所と一致する。3つ目の集積点は2集落の境界付近に上豊岡21%, 下豊岡30%である。回答が1点にならずやや広がって分布するが、これは2集落の住居が景観的に連続し、加えて行政的な境界を示す空間的な表示がないためと考えられる。4つ目の集積点は2集落を貫く道と直交する、中心市街へ抜ける道沿いに上豊岡35%, 下豊岡40%の集積を示す。

以上の、①1つ目・2つ目・3つ目の集積点から、居住域の境界点がムラの境として共有に認識される、②4つ目の集積点から、他集落へ抜ける幹線道の居住域のはずれがムラの境として認識される、③3つ目の集積点から、住居が景観的に連続し特別な境界表示がないにもかかわらず、ムラのまとまりが心理的なムラの境として反映される、④1つ目・2つ目の集積点から、虫送り行事の蛇が民俗行事の一つである村に入る道に注連や藁人形を設置する道切り^{9),10)}の象徴として位置づいていることが導かれ、ムラ領域に対応したムラの境が心理的な境として認識されることを得る。

4) トナリ領域認識

集落の社会的活動を運営していくために通常、内部に行政末端連絡単位ともなる地縁的な5~10戸の班が組織される。この班組織は、地縁的な人々の生活扶助の役割も果たす近隣の組織であるが¹¹⁾集落の社会的な活動を主の機能とする公式の組織であるため、班組織とは別に日常のインフォーマルな生活扶助を目的とした近隣関係が発生する³⁾。この近隣的な関係をトナリ領域とし設問「あなたは日常生活を営んでいくためのまとまりとして隣近所はどのくらいの大きさを考えますか、地図にその範囲を記して下さい」によりとらえる。

回答線を累積すると(図5参照)、自宅をほぼ中心とする5~10戸のまとまりをトナリ領域とする回答線が少しずつズレながら連鎖しており、特定の近隣関係をトナリとして認識する傾向は見られないが、道をはさんだ住居を含めて領域とする特徴を見いだすことができる。

道をはさむ住居の間の距離、敷地境界~道~川~道~敷地境界はおよそ18mであり、大声での会話によらねばならない。川にかけられた橋はおよそ100m強の間隔にしか設置されておらず、行き来はそれほど自由ではない。そのため、上述した班組織は道に沿った片側の住居の10戸前後のまとまりとなっている。ヒヤリング調査によれば、日常的な行き来は特に行っておらず、葬式やかつては盛大に行われた結婚式の互助も班をベースとする道に沿った片側の住居が中心となるとしており、わずかに川掃除に川の両側の住居の協同が見られる。集落内の人すべてが顔見知りであること、設問の隣近所のこと

設問「日常生活を営むためのまとまりとして隣近所はどのくらいの大きさを考えますか」に対する地図記入の回答線を累積して示す

図-5 トナリ領域認識

ばに向こう三軒両隣が連想されることを考えあわせても、道をはさむ住居のまとまりを心理的に近隣関係として認識していることは特徴的な傾向として抽出される。

以上の、ムラ領域・ムラ境・トナリ領域にみる集落成員に共有される集落空間認識の考察より、集落成員が道を空間軸としてまとまりを形作っていることが指摘できる。

3. 道を空間軸とする住居の構え方

1) 道を空間軸とする住居の並び

集落居住域の中ほどを貫く南から北へ流れる川はゆるやかに蛇行しており、川の両側の道も沿って蛇行する。下豊岡の、川を十字に横切り他集落へ抜ける道の部分では住居がこの道に沿って東西方向に並ぶが、多くの住居

は川に沿った道に沿いほぼ一列に南北方向に連続する。通観すると、店舗・工場の併用住居を除いて、住居は川＝道に規則的な並びを取る。後述する主屋が矩形的共通した間取りをとるので、主屋の規則的な並びを屋根の棟方向でとらえ、説明する。川の蛇行、＝道の蛇行を大きく5等分し、主屋の棟方向を累積すると図-6となる。

それぞれに川と沿う道の傾きを入れてあるが、この道の方角に対し棟方向は、1. では1住居を除き道に対しおよそ $85\sim115^\circ$ に、2. は $70\sim100^\circ$ 、3. は1住居を除き $75\sim105^\circ$ 、4. は1住居を除き $85\sim110^\circ$ 、5. は1住居を除き $75\sim95^\circ$ に累積を示す。これにより、それぞれの蛇行ごとに川と道に直交する棟方向を中心に $20\sim30^\circ$ の角度の振れをもって主屋が配列していることがわかる。すなわち、住居は川＝道を空間軸とした配列をとり、川の蛇行につれて連続的な景観を構成する。

2) 道を空間軸とする屋敷構え

川＝道はおおむね南～北の方向であり居住地は道の両側に形成されていることから、道を空間軸とする屋敷構えは、道に対する主屋の敷地内の位置によって説明することができる。

まず道の西側立地の典型(図-7参照)を例に説明すると、茅葺寄棟の通称八方を乗せた主屋は、敷地北側の東側、つまり道側に配置され、主屋に並んで、敷地西側、つまり奥側に附属屋が設けられる。津軽地方は冬季の寒さが厳しく、主屋に連続する附属屋は、生活・生産空間を補う重要な位置づけである。さらに敷地の西奥に納屋を置き、トラクターなどの農耕機をあわせ収納、主屋に対し南側に倉の配置構成である。

一方の東側立地の住居は、敷地北側の西側、つまり道路側に主屋が配置され、主屋の東側、つまり奥側に附属屋の配置である。さらに敷地の東奥に倉、主屋の南側で道路側に納屋を配置し、自動車を収納する配置構成である。

それぞれの敷地の使い方は一定しないが、配置の仕方には主屋を道路側に寄せて配置し、南側庭をあける、道路の反対側である敷地奥に附属屋・倉を置くなど、道を空間軸とする建物の配置傾向が見られる。

このことを、道に連続する全住居を取り上げ検討する。個々の敷地形状は異なるが、川＝道を空間軸とする主屋の配置傾向を見る視点から便宜上、矩型をモデルとしておおむねの位置を集計すると図-8を得る。道の西側立地の住居を見ると、敷地の北東隅、つまり北側の道に面する位置が95%の高い率を占める。次いで、道側と北側に少数例が見られる。東側立地の住居を見ると、まったく逆転して、敷地の北西隅、つまり北側の道に面する位置が93%の高い率となる。残りは、道側と北側に少数例が見られる。

以上により、典型例で見た屋敷配置の傾向が集落全戸

図-6 主屋の棟方向

に及ぶ一定の傾向、すなわち主屋を道側に寄せ、南側に庭をあける屋敷配置を得る。

主屋を敷地の北側に寄せて配置する志向は、南側を作業庭としてあげようとする、冬季の融雪に日照が欠かせないことから説明できる。一方、道に面して主屋を配置する傾向は、生活動線として優位であることで説明が可能であるが、附属屋を含む生産動線の点では必ずしも言えない。上豊岡・下豊岡の全戸に及ぶこの主屋の配置形式は、南北の川＝道を空間軸として住居を構えようとする仕方の共有と考えることができる。

3) 道を空間軸とする間取り

道を空間軸として住居を構えようとする仕方の共有を、間取りの考察によって検討する。

まず、屋敷配置で典型例として紹介した住居の間取りを説明する(図-7参照)。道の西側立地の住居の特徴は、

図-7 屋敷構えと間取り例

図-8 主屋の配置

①道側、つまり住居の東側に4部屋のザシキと呼称されている部屋が並ぶこと、②続く住居の中ほどにダイドコ・ネドコと呼称される部屋が並び、③道から最奥の住居の西側に、トロジと呼称される土間と床上化された2部屋のナガシが並ぶことである。

①の4ザシキのうち北側・道側のザシキには床の間・仏壇が置かれ格式・儀式空間を象徴する。聞き取りでも日常は通常使用せず、法事など儀式の際のみ使うとしており、格式のある儀式空間を位置づける。このザシキと対角線に位置する、南側、ダイドコに隣接するザシキには、ゲンカンと呼称される入口が設けられている。外観でも、寄棟屋根の平側に切妻屋根がかけられており、入口を象徴する。聞き取りでは、このゲンカンは日常は使わず、改まった接客や儀式の時に使用する、ゲンカンで

入ったザシキは主に接客に使うとしており、公空間専用の入口であることを示す。つまり、この4ザシキは専用の入口をもつ公空間であり、儀式～接客の内容によって4ザシキに使い分けが生じる仕組みである。

②の南側ダイドコは、日常の家族の部屋として使われる。テレビ・座卓・電話などの生活用具が集中し、生活空間の中心であることを示す。北側ネドコは夫婦寝室であり、老夫婦や子供はザシキの一部を使用するか、納屋の2階を使用する。

③の南側トロジは土間で、かつては北側ナガシとともに一体的な土間空間であったとのこと、その後、ナガシを床上化し、部屋として独立させたため土間が小さくなっている。ナガシの2部屋は、呼称は同じで間仕切りも作られていないが、一方を板間の炊事空間、他方を畳の食事空間と機能分離をしている。トロジには、もう1つゲンカンと呼称される入口が設けられる。先に説明したゲンカンが通常は使われないことに対し、このゲンカンは日常の出入りに使われる生活動線の要となっている。トロジは土間空間が小さくなっているが、さらに西奥に附属屋を隣接して作業スペースを確保しており、こちらのゲンカンはトロジを介してこの作業スペースに連結できることから、生産動線の要でもあることが言える。

以上から、西側立地の住居は道側に専用の入口をもつ公空間、続いて中ほどに日常の生活空間、住居の奥側に

日常の生活・生産動線の要となる入口と作業空間の構成を導くことができる。

続いて東側立地の住居を説明する。間取りの特徴は、①道側である西側に4つのザシキとゲンカン、②続いて中ほどにダイドコロ2部屋とネドコ、③道から最奥の東側に床上化されたトロジとナガシ、ヒヤシと呼称される入口であり、西側立地の住居の構成とはほぼ一致する。相違点は、西側住居のダイドコロ1部屋に対し、東側の住居はダイドコロと呼称、部屋を小さく区画したこと、西側の住居のナガシが板間と畳で炊事、食事の機能分離が見られたのに対し、東側の住居は板間の1部屋であること、西側の住居のトロジが土間であったのに対し、東側の住居は床上化していること、西側の住居のトロジに面する入口がゲンカンと呼称されているのに対し東側の住居ではヒヤシの呼称であることで、基本的な空間構成はすべて符合する。使い方もそれぞれの部屋に対し一定しており、結局、道を軸として、道側に公空間、中ほどに生活空間、道から最奥に日常の出入口と作業空間と、空間構成が線対称をとっていることが指摘できる。

ほかの住居について見ると、農業構造の変化の中で出稼ぎが増え生活の様子が変わり始めたこと、寒冷地のため建物の傷みが早いことと理由で、改築・新築住宅も少なくない。しかし、総じて道を軸とする構成を大きく変えていない。例えば、規模の小さい住居では4部屋構成のザシキを仏壇のある儀式中心と接客中心の2ザシキとするが全体的な構成は変えていない、土間の床上化、ダイドコ・ナガシの機能分離が見られるが、やはり全体的な構成は変えていない、部屋の呼称には一部で異なり、また家族構成によっては使い方の変化も起こっているが、全体的な構成を大きく変えることはしていないなどである。

これらの道を軸とする線対称の空間構成が集落全体に及ぶ構え方であることを、アンケート調査の設問「間取りの概略と各部屋の呼称を記して下さい」によるザシキの位置によって見る（図-9参照）。

西側立地の住居のうち、道側をザシキとするものは83%に及ぶ。つまり、道側を公空間、中ほどを生活空間、奥側を日常の入口とする空間構成をとる住居が極めて多いことを示す。一方、東側立地では道側をザシキとするものが84%で、西側立地の住居と同様に高い割合を占め、道側を公空間、続く中ほどを生活空間、奥側を入口の空間構成が志向されることを示す。

店舗や家内工業を営む住居も多く、これらは道側をその用にあてておりザシキが道側にならないことを考えれば、道側を公空間とする構成は極めて高い志向と言える。すなわち、道路を対称軸とする道側＝公空間の構成が共有の間取りの仕方であるの結論を得る。

2) 屋敷構え・3) 間取りで明らかにしたように、主屋

図-9 ザシキの位置

の公空間・生活空間・作業空間の並び方は、生活・生産動線の機能から附属屋・作業庭・倉の屋敷配置、そして道と連関するが、しかし、主屋を道側として日常的には使用しない公空間、並びに非日常用ゲンカンを道側に配した空間構成が、南～北の道を対称軸として共有されることを得た。1) の道を空間軸とする住居の並びの考察と合わせ、道を共有の空間軸とする住居の構え方の共有が証明される。

2. では道を空間軸とする集落成員のまとまりを明らかにしており、文化人類学の知見により¹²⁾、顕在化した集団のまとまり方・空間の構え方から成員の心的態度を貫く共同体的社会への関心を演繹することができる。言い換えれば、道に並ぶ調和の取れた景観は、道路を空間軸として構えようとした共同体的社会への関心の表現の結果である。

4. 防風雪柵カッチョの構成と共同体的社会への関心

1) 防風雪柵カッチョの仕組み

対象地中里町を含む津軽平野は、日本海にそそぐ岩木川沿いに開けた沖積層で、起伏のない平坦地がそのまま日本海に面する立地となっている。地味はあまり良くなく、大径の樹木を見ることはできない。気象データに示すように冬期の寒さと西よりの風は強く、日本海の湿気は遮るもののない立地に地吹雪となって吹き荒れる。

カッチョとはこうした背景の中で生活空間を風雪から防ぐため、津軽平野特有の生活の知恵として作り出された防風雪用の柵である。つまり、主として冬期の西からの地吹雪を防ぐ仮設的作物である。しかし、強風雪を防ぐために骨組は強固に設置されこれが逆に解体し難くさせており、年間を通して骨組だけを残すことが多い。また、生垣や屋敷林の育ち難い地味のため、カッチョが境界を兼ねる場合も少なくなく、春から夏にかけてのヤマセ（偏東風）にもカッチョが効果的なことから、屋敷の囲いとしても利用することもあり、夏期でもその仕組みを観察することができる（写真参照）。

カッチョの骨組材は、柱・横木・控え木の3種の組み合わせで、いずれも直径10cmぐらいの小径木、または建築の廃材が使用される。高さは1.5mぐらいのもの、2m前後のもの、3m強のものが多く、低い場合は控え木は省略される。高い場合には、鋼管を柱とする例もあるが数は少ない。仕上げ材は、かつては茅やこもも多く使われたと言われるが、現在は圧倒的に板材が主となっており、補うように茅、ネットを用いる例が多い。

特徴的な構成をあげると、1) 3m強の長ものの板を並べる、2) 2m強の板に加え隙間を茅の束ねたもので

冬のカッチョ

夏のカッチョ

補う, 3) 2m 強の板の上部にネットをはる, 4) 1.5m ぐらいの板を並べる, 5) 1.5m ぐらいの板の上部に茅束を並べる, 6) 1.5m ぐらいの板の上部にネットをはる, 7) 2m ぐらいの高さに茅束を2段重ねて並べる, である。

カッチョはそれぞれの敷地の所有者が作っており, 統一された構成とはなっていない。しかし, 住居が道に沿って帯状に連続し, その西側に地吹雪を防ぐためのカッチョが隙間なく連続しており, 素材の共通性もさることながら住居群を一体的に覆う皮膜として, 特徴的な景観を作りだしている。

2) カッチョの方位別分布

おおむね北—南の道を空間軸とする対称的な空間構成について明らかにしたが, 対して西からの地吹雪を防ぐカッチョは同様に道を空間軸とする構成をとるのか, 西を方位軸とする構成かを検討する。

まず始めに, カッチョを含めて個々の住居の屋敷の囲

いがどの方位に設置されているかを見る。総じて北—南の道に対し矩形の敷地が連続する居住地なので, 東・西・南・北の4方位に大別して屋敷の囲み方を累計すると表—3となる。

道の西側立地の住居では4方位ともに囲むものが25%, ついで西・北・南12%, 西・北・東12%などの西を中心として3方位を囲む住居が計28%, 西・南8%, 西・北8%などの西を含めた2方位を囲む住居は23%と西に対し囲みを作ろうとすることがうかがえる。

対して道の東側立地の住居では, 4方位を囲む住居は6%, 西を含めた3方位を囲む住居は17%, 西を含めた2方位の囲みの住居は32%, 一方, 4方位とも囲まない住居は16%と西に対する囲みが全体的に軽微となっている。

詳しく見るため, 4方位別に囲みを累計し囲み率を算出すると図—10となる。方位別の囲みと道に対する住居の立地を対比すると, まず西側の囲みは, 道の西側立地の住居では82%と高率を示すのに対し, 東側立地の住居は62%, 西側住居の囲み率82/東側住居の囲み率62=1.3と大きな差が見いだせる。同様に東側の囲みを見ると, 西側立地の住居は58%, 東側立地は32%, 58/32=1.8と, 西側の囲みに対し東側の囲みが少なくなる傾向とともに, 道の西側立地の住居に対し東側立地の住居が軽微な囲みとなっていることを示す。

以上の西—東方向のカッチョの分布傾向から, 西からの地吹雪を防ぐカッチョの役割が説明されるとともに, 道の西側立地住居の西側の囲みに対して東側立地住居の軽微な囲みが特徴として導かれる。

道の西側立地住居

道の東側立地住居

図—10. 屋敷の囲みの方位別分布

表—3 方位別屋敷の囲み

囲みの位置	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	無し
西側立地住居	0	5.7	1.1	2.3	2.3	6.9	3.4	8.0	4.6	8.0	11.5	1.1	11.5	4.6	25.3	3.4
東側立地住居	1.4	7.0	4.2	8.5	2.8	8.5	1.4	11.3	2.8	12.3	5.6	1.4	4.2	7.0	5.6	15.5

屋敷の囲み方をおおむね上を北として, 道の西側立地・東側立地に分け累計、%で示す

このことは、2集落の中ほど、他集落へ抜ける東—西方向の道に沿って東西方向に住居が連続する図—6-A地区の住居の囲み傾向で、より明瞭に見ることができる（図—10参照）。まず囲み方の傾向を見ると、南—北の道の西側に立地する図—6-B地区の住居の西側の囲み70%に対し東側は44%で、1つに西側に対する東側の軽微な囲み方、2つに上で説明した南—北方向の道に沿って並ぶ住居の囲みに対し囲み率が低いことがわかる。次に道の東側に立地する図—6-C地区の住居の囲みを見ると、西側の囲みは31%とさらに低く、東側はわずか6%で、同様に西側に対し東側の軽微な囲み傾向と南—北方向の道に並ぶ住居の囲み率に対し囲み方が少なくなる傾向を得る。

この道の西側立地に対する東側立地の住居の軽微な囲み傾向は、西側住居と東側住居の囲み率の比、西側住居の西側囲み率70/東側住居の西側囲み率31=2.2、西側住居の東側囲み率44/東側住居の東側囲み率6=7.0によって裏付けられる。

主屋・附属屋の建物の集積と敷地の囲みの重なりは、防風雪効果を高めることができる。道の西側立地住居の西側囲みに対し相対的に東側の囲み率が低下していることは、西からの地吹雪に対し西側の囲みとその集積が有効であることを意味する。さらに、カッチョなどの防風雪柵により風下側、この場合は東側の空間が守られることは、風上側、この場合は西側に大量な積雪が生じることを考え合わせれば、住居単体であれば西側の囲みを強固に対して東側を軽微に、住居の集合であれば西側住居の囲みを強固に対して東側を軽微に作ろうとする傾向が、東側の安定した生活空間確保の仕方であると理解で

きる。

西側と東側の囲みについて見てきたが、続いて北側・南側の囲みについて見る（図—10参照）。道の西側立地住居の北側の囲みは64%、対して東側立地住居は38%で、西側立地住居の北側囲み率/東側住居の囲み率=1.7、同じく道の西側立地住居の南側囲み率60%、対して東側立地住居は45%で、西側住居の南側囲み率/東側住居の囲み率=1.3と、西側立地の方が東側立地に比べ囲み率が高くなっていることを示す。北側の囲み・南側の囲みともに西からの地吹雪に直接的な効果はなく西側立地住居・東側立地住居ともに同じ囲み率が仮定される。しかし、西側住居に対し東側住居の北側・南側いずれも囲み率が低いことから、西側住居群の囲みによる防風雪効果によって東側は相対的に地吹雪が弱まり囲みが軽微なものとなっていることが導かれ、上記の考察を裏付ける。

3) カッチョの方位別高さ

屋敷の囲みの分布の考察により、西側住居群の囲みによる東側住居群の安定した生活空間確保の志向をとらえたので、続いてカッチョを含めた屋敷の囲みの方位別の高さの検討によりこのことを検証する。

囲みの高さを1m~1.5m~2m~に大別し、4方位別に囲みの分布と対照して累計、割合を算出すると図—11となる。まず西側立地住居の西側の囲みを見ると、2mを超えるものが41%と群を抜いて高い。1.5m以上30%を含めると71%になり、高い囲みであると同時に、囲み率と合わせると囲み面積が大きいことがわかる。対して西側住居の東側の囲みは1~1.5mが35%、1.5~2mが15%で、西側の囲みに比べ低くなり、囲み量も

図—11 屋敷の囲みの高さ別囲み率

小さくなっている。東側立地住居の西側の囲みは1～1.5 mが34 %、1.5～2 mが20 %と、西側立地住居の東側と変わらない高さ、囲み量で、西側住居の西側に比べ軽微な囲みであることを示す。東側立地住居の東側の囲みは1.5～2 mが14 %、1～1.5 mが11 %と、さらに軽微な囲みとなっている。

この、道の西側立地住居の西側の高く、広い囲みと、対して道をはさむ西側立地住居の東側と東側立地住居の西側の低くやや小さい囲み、さらに東側立地住居の東側の相対的に低く、小さい囲みの傾向から、東側居住空間の安定が西側立地住居の西側の強固な囲みによっていることが裏付けられる。

北側、南側の囲みの傾向は、西側立地住居の北側・南側の1～1.5 mがそれぞれ30・36 %に対し、東側立地住居の北側・南側は～1 mにそれぞれ41・44 %と囲みが低くなる傾向を示し、上での考察を裏付ける。

ヒヤリングによれば、北側のカッチョは屋根から落ちる北側の積雪から住居の損傷を守る働きをする。北側のカッチョとは、その住居のさらに北側の住居から見れば南側のカッチョであり、北側の積雪とは北側の住居から見れば南側庭の積雪である。これから、南側の雪溶けが早いことを前提に相互が南側住居の雪を自分の庭に許容しようとする生活の知恵の合意を見ることができる。そしてまた、西側立地住居のカッチョの高さに対し、川と道をはさんでおおよそ18 m離れる東側立地住居のカッチョが相対的に低く作られることから、集落の西側の囲みが東側立地住居をも含んで有効であることが指摘できる。

東側立地住居がその西側に高くて強固な囲みを作る

設問「地域の人々のつながりについてどう考えますか」に対する「1：同じ場所に住んでいるから、2：自分の要求を解決するため、3：共同の利益を守るために連帯する 4：個人の集まり 5：人間関係に関心が無い」の回答率を示す

図—12 地域的連帯性志向

図—13 西側立地住居と西側カッチョの包括的な働き

と、住居の西側を抜ける道に雪の堆積を招き交通上の支障となって、集落社会の生活上のマイナスにつながる。つまり、上で考察した西側立地住居の西側の強固なカッチョの作り方は、雪と風の性質を考慮した空間的な仕掛けの了解の結果であり、単に西側立地住居のためばかりでなく東側立地の住居をも包括した作り方にほかならない。トナリ領域でとらえた、日常的な交流がさほどないにもかかわらず道をはさむ東—西の近隣的なまとまりの認識は、このことを裏付ける。

集落成員の結び付きは2.3. で明らかとしているが、設問「あなたは自分の住んでいる地域の人々とのつながりについてどう考えますか」によって得た地域的な連帯意識の傾向によっても（図—12 参照）、同じ場所に住んでいるから・共同の利益を守るため・自分の要求を解決するため連帯しようとする回答の91 %から、共同体的社会への高い関心が指摘される。

以上から、西側住居の個々の営為による西側の強固なカッチョの形成は、東側の安定した空間を目指す集落成員に了解された作り方であることを結論として得る（図—13 参照）。

5. まとめ

以上の考察をまとめると以下となる。

①虫送りの伝統行事に表出された道をハレの舞台・集会所を活動の拠点・蛇の設置をムラ境として集落成員が共有する

②川に沿った道に並ぶ住居の集積をムラ領域として共有する

③居住域のはずれ・他集落へ抜ける道との境・2集落の境をムラ境として共有する

④道を空間軸とし、主屋を直交に配列する仕方を共有する

⑤道を空間軸とし、道側に主屋、南側を庭とする敷地の奥に附属屋・倉を配置する屋敷構えの仕方を共有する

⑥道を空間軸とし、道側にザシキ・ゲンカンの公空間、中ほどに生活空間、奥側に日常の出入り口と作業空間を並べる間取りの仕方を共有する

⑦西側からの地吹雪を防ぐカッチョの作り方を共有する

⑧西側住居群の西側カッチョが東側住居を包括する働きを共有する

以上の考察により、沖積低地を南北に流れる川とその両側の道を空間軸とし、川に沿って形成された微高地に立地する帯状の居住域の空間形態と、西からの目も口も開けられないと言われる地吹雪に、生活の知恵として防風雪柵カッチョが形成・継承されていることが明らかとなる。これはすなわち、風土的条件の空間形成への反映である。

厳しい風土的条件のもとで、住民は個々の力で自らの

生活空間を構築する。それは風土的条件をクリアすることが第1に目指される。上での考察では、加えて道を空間軸とする住居の構え方、東側住居を包括する西側カッチョの作り方を明らかとした。これは共同体的社会への関心の反映を意味する。文化人類学の知見によれば、空間の構え方・作り方は共同体的な社会集団において文化として学習・継承される仕方である。この場合、ムラの行事・ムラ領域・ムラ境を共有する社会集団のまとまりが共同体的社会にあたる。

すなわち、結果としての地域に固有の調和の取れた景觀は、風土的条件を背景とした共同体的な社会集団における文化としての空間の構え方・作り方の表現である。言い換えれば、集落で共有される空間の作り方は共同体的社会への関心の反映である。

参考文献・注

- 1) チーム田 農村工学研究 35, 集落空間の計画学, 農村開発企画委員会, 1983.12
- 2) 齊木崇人: 農村集落の地形的立地と空間構成に関する研究, 学位申請論文, 1986.2
- 3) 拙稿: 日本建築学会計画系論文報告集, 403号, pp.105~113, 1989.9
- 4) ここで用いている関心の語は、例えば広辞苑(岩波書店)の「注意を向けて行動を一定の方向に導いて行くこと」の一般的な用法より積極的な意味を考える。すなわち、ハイデッカーなどの実存哲学による主体の世界内存在としての自己存在の了解として行動される心的な態度(例えば「哲学事典」平凡社)として用いており、人がその属する社会において自己の存在を社会的・歴史的に定位しようとする働きをも意味に含んで考える。ゆえに、関

心の傾向としての質は一定であることが必然であり、社会的にはレベルの下位から上位に、時間的には意識し得る過去・現在・未来において連続的な質を有すると言える。

- 5) 例えば、太田博太郎ほか: 日本の町並み, 5巻, pp.133~ , 第1法規, 1982.2
- 6) 例えば, 1987年公布, 集落地域整備法。1986年度開始国土庁主催, 農村アメニティコンクール
- 7) 例えば, 世界大百科事典, 29巻, pp.629, 平凡社, 1972.4
- 8) 地域という言葉は抽象的であるが, 先行する調査において「むら」「まち」などの語を用いたところ行政単位との混乱がみられた。心理的な空間の大きさをとらえる意図から本調査では地域としている。
- 9) 上野和男ほか: 民俗研究ハンドブック, 吉川弘文館, pp.44, 1978.8
- 10) 柳田国男は「民俗学辞典」pp.621~, 東京堂出版, 1951.1の中で, 「常民の持つわが村という観念は行政上の村よりも狭い範囲の土地に対していだかれており多くは大字すなわち昔の村」のことであるが, 「生活における心理的村境は必ずしも現実の字の境に一致していないことが多い。これを最も明確に示すのは道切りや虫送り」とし, 道切り・虫送りの豊富な事例によって常民の心理的な村境を説明している
- 11) 鈴木栄太郎: 農村社会学原理上, 未来社, pp.350~, 1968.4
- 12) 例えば, ルース・ベネディクト著「菊と刀」社会思想社1967.3の訳者, 長谷川松治は同著 pp.371~で, 同一の動機ないしは心的態度によって貫かれている一群の顕在化した行動あるいは習慣が文化として共有されることを指摘している
(1989年7月10日原稿受理, 1990年1月20日採用決定)